

「三時間も待って診察は三分だけ!」「本当はこの治療法でいいの?」。日本の医療に不満や不安の声が高まる中、しびれを切らした患者たちが、国外に脱出し始めている。米国の医療機関も、日本人患者の受け入れに向けて体制づくりに乗り出した。海外への患者流出は、日本の医療にどんな影響を与えるのだろうか。
(本田麻由美・写真も)

順番待ち

「がんの手術を受けるのに、どうして一か月も待たされるのか、疑問を感じたのです」。四年前、米国で乳がんの手術を受けた都内の服部由佳さん(38)は、渡米の理由をそう話す。

九九年四月、都内の大学病院で乳がんが見つかった時、しこりは既に三・八センチになっていた。「生き残れるでしょうか」と聞くと、医師は「半々ですね」。当然、すぐに入院して手術と

になりました」と言われた。手術の順番を待っている患者が多いからだという。

「それは、医療サービスとしておかしいのではないかと。帰国して夫と相談し、

米国の知人に事情を聞いてみた。すぐに、知人が住むニュージャージー州の病院を紹介され、翌日に渡米。再検査で乳房を温存する手術はできないと診断され、

他の病院の医師にも意見を聞いた上で、全摘手術と同時に乳房再建手術を受け、入院は二泊三日。渡米二十日後には退院していた。「決め手は、対応が早く、

医師から事前に乳房再建も同時にできるなどの説明をメールで受けたこと」と服部さん。費用は、夫の仕事先の保険が海外の治療にも適用されたため五十万円程

四十歳代の男性も、「日本では受けられない最新治療を含め、納得いく治療法を選びたい」と、今年の春に渡米した。診断を受けた後、国内の病院をいくつか回ったが、自分にとって最善の

「安心の設計」は、火曜日の朝刊、金曜日の夕刊に掲載しています。次回は、夕刊(12月12日)が「訪問リハビリが足りない理由」、朝刊(12月16日)は「公立障害者施設の改革」です。

日本では

乳がん手術順番待ち1〜2か月

外国で広く承認の新薬も未認可

MDアンダーソンがんセンターの小児病棟の様子。治療は医師の判断だけでなく、看護師や臨床薬剤師らが相談して決めることで、医療ミスも少なくすることができるという

度の負担で済んだが、「診察や検査のたびに何時間も待たされたり、不必要に長い入院や差額ベッド代で費用がかさんだりという日本の現状を考えると、金額自己負担でも海外の病院を選みたい」と言う。

新薬で治療

白血病を患う関西地方の

は、がんなどの患者も自分で海外を目指すケースが出てきた」と言う。

多い規制

海外での治療を考える患者が増えている背景にあるのは、患者本位とは言えない日本の医療体制だ。国内

の病院の多くは、例えば乳がんの手術に二〜三週間の入院を必要とし、日帰りや短期間の入院で済む米国に比べ、順番待ちに時間がかかる。

また、海外で広く使われている薬が、国内では未承認で自由に使えないことがある。うえ、自己負担で最新の治療を受けたくても「混合診療」の禁止で多額の費用がかかるなど、規制が多いことへの不満も強い。

さらに、国内では病院や医師の専門性、治療実績などのデータが少ないのに対して、米国などでは様々な情報公開されているため、医療機関を選びやすい。インターネットの普及で、世界の最新の治療情報を手でできることも、より良い医療サービスを求めて海外を渡る患者の増加につながっている。米国で胸を腫らした医師がいるアジア各国でも、日本人患者が治療を受けるケースが増えているという。

「安心の設計」
連載企画

- ◆「世界の社会保障」 11月25日
- ◆「変わる年金」 12月2日
- ◆「患者・記者の視点」 12月2日

(月2〜3回のペースで随時掲載します)

前回掲載日 次回掲載予定
11月25日 12月16日
12月2日 12月16日
12月2日 1月13日